

令和 4 年 5 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00645

研究課題名(和文) コーパス言語学の新展開と中英語写本・初期近代英語印刷本に見る個人言語の変動

研究課題名(英文) Recent trends in corpus linguistics: exploring the language of individuals in the Middle and Early Modern English periods

研究代表者

家入 葉子 (Iyeiri, Yoko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20264830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近年、コーパスの大規模化と合わせて多くの研究者が関心を持っているのは、一見これと矛盾するように感じられる個人言語の掘り下げである。本研究では、一般に公開されているコーパスに加えて、研究代表者が自ら研究目的のために構築したコーパスや各種電子テキストを用いて、個人言語が言語変化全般にどのような形で寄与するかについての調査分析を行った。扱った主要なテーマは、中英語から初期近代英語にかけての副詞の変化、中英語写本におけ綴り字の変動、thatの複数形thoseの形態上の変化である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本格的な英語の史的コーパスであるHelsinki Corpusが公開されてから約30年が経過した現在、英語の史的研究においてコーパスをどのように利用するかを再検討する時代が来ている。本研究では、近年の研究動向を踏まえ、個人言語の変動の詳細な分析を通してかえって言語変化全般への理解が深まることを、中英語、初期近代英語における具体的な事例とともに明らかにした。また、英語史研究のみならず、現代英語における変化・多様性の研究にも応用できる視点として、コーパスの構築そのものにも多様性が求められることを示した。

研究成果の概要(英文)：The focus of the present research has been on linguistic behaviours of different individuals (i.e. authors and scribes). Using various corpora and digital texts, some of which I have compiled for this research purpose, I have explored the historical development of -ingly adverbs and the presence and absence of -s in always in Late Middle and Early Modern English. I have also studied the spelling variation of 'woman' (e.g. womman and woman) and the shift from tho to those in Middle English. It has been revealed from this research that linguistic behaviours of individuals often deviate from the overall trend, and their examination will contribute to the understanding of the process of language change.

研究分野：英語史

キーワード：中英語 写本 初期近代英語 言語変化 英語史

## 1. 研究開始当初の背景

本格的な英語の史的コーパスである Helsinki Corpus が公開された 1991 年から、ほぼ 30 年の歳月が経過する中で、英語コーパス言語学は第 1 世代、第 2 世代、第 3 世代と性質を変容させながら発展してきた。第 3 世代の現在、コーパスを利用した言語研究において特に関心が高まっているのは、皮肉にも個人の言語、個別の言語といった言語使用における特殊性である。「皮肉にも」というのは、コーパス言語学とは本来、言語分析を量的な形に持ち込むことで、個別性をできるだけ排除するという代表性の考え方を基盤に据えた研究方法だからである。大規模コーパスが各方面で構築される一方で、個別の言語特性をどのように扱っていくかが、コーパス言語学全般において重要な課題の一つであると考えられる。

## 2. 研究の目的

上記のようなコーパス言語学を取り巻く背景を考慮し、本研究では、英語史全体の言語変化の流れを踏まえた上で、特に個人言語・個別言語(中世写本などでは文献を執筆した個人が特定できないことも少なくないので、個別言語という用語も用いる)に焦点をあてた言語分析をおこなうこととした。

言語変化の通時的な潮流については、近年では大規模コーパス等の利用によって以前よりも比較的容易にその概略をつかむことが可能になってきた。しかし、どの時代にもその潮流の最先端に、あるいは最後尾に位置する言語使用者が存在し、言語は、変化の段階が異なる言語使用者の総体から形成されている。これに起因する言語のヴァリエーションのあり方を記述することで、言語使用者としての個人が言語変化にどのように寄与してきたのかを明らかにすることが本研究の主要な目的である。

## 3. 研究の方法

研究は、個人言語・個別言語の研究に適したコーパスを構築すること、そしてそのコーパスを利用した言語分析をおこなうこと、によって進めた。また、言語分析の結果については、より大規模なコーパスで観察することのできる通時的な変化の視点から、歴史的な位置づけを探る試みをおこなった。

研究期間の前半では、個人言語・個別言語の研究のためのコーパスとして、すでにある程度構築を進めていた Selected Middle English Texts in Print (METiP) を利用し、加えて新たに Selected Authors' Writings in the Early Modern English Period (SAEMEP) の構築を進めながら、同時に言語分析にも着手した。いずれも、Early English Books Online (EEBO) のテキストデータをもとにしたコーパスである。研究期間の後半は、さらに個別テキストの詳細な分析をおこなうために、中英語期の多様なテキストの電子版をコーパスとして活用する方法も合わせて導入した。

参照するための大規模コーパスとしては、EEBO 本体、あるいはここからテキストを抽出して作成した Early Modern English Prose Selections (EMEPS) 等を必要に応じて使用した。

## 4. 研究成果

### 個人言語の特異性

#### (1) 英語の副詞の発達についての研究 *ingly* 副詞の場合

研究期間の前半では、上記の研究方法に基づいて、主に英語の副詞の分析を進めながら、必要に応じて大規模コーパスとの比較をおこなうことにより、個人言語の特異性を明らかにすることにつとめた。これに関する業績は、末尾の業績表にある、である。

まず、口頭発表の業績- では、*-ingly* 語尾を有する副詞に注目し、その中英語後期から初期近代英語期にかけての拡張の過程を追跡した。さらに、Geoffrey Chaucer, John Trevisa, Thomas Malory, William Caxton (以上、中英語期) および Sir Thomas More, Francis Bacon, Richard Baxter, John Locke (以上、初期近代英語期) といった言語使用者の英語が、*-ingly* 副詞の発達全般の中でどのような位置付けになるかにも焦点をあてた。

中英語期では *likingly*, *lovingly* など、*-ingly* 副詞の種類そのものが限定的であるが、初期近代英語期に入るところから、*-ingly* 副詞の種類が急速に増大するとともに、文中での機能についても多様化が見られることを明らかにした。

なお、口頭発表の内容に大規模コーパスの分析を加えて、さらに議論と内容を拡張した上で論文として発表したのが、業績- である。

## (2) 英語の副詞の発達についての研究 *always* の場合

次に重点的に扱った副詞は *always* である。こちらについては、*always* という副詞の形態の確立に焦点をあて、*all + way* が一語とみなされるようになっていく過程、さらに *s* が付加されて現在の *always* が確立する過程を明らかにすることにつとめた。大きな変化が起こるのは主に初期近代英語期であるとされることから、SAEMEP を分析の対象とすることとし、その研究結果をまとめたのが、業績- である。

この論文では、まず初期近代英語期において現在の *always* の形態が急速に確立していくことを示し、同時に Sir Thomas More のように、まだ形態が定まらない形（たとえば、*all way*）の際立った使用を見せる言語使用者がいることにも注目すべき点を指摘した。論文中では、William Cowper についても、やや特殊な使用状況を示す著者として取り上げている。

### 個人言語の中のヴァリエーション

#### (1) 個人言語の中の綴り字のヴァリエーション

上記のように、研究期間の前半では言語変化全体の潮流の中で観察できる個人言語・個別言語の特殊性に焦点をあてた。研究期間の後半では、このようにして特殊性を浮き彫りにすることができた個人の言語の中に、さらにどの程度のヴァリエーションが見られるかについての分析にも着手した。この期間の研究成果は、現段階ではいずれも口頭発表のみで、業績表の と がそれである。

まず業績- では、中英語写本の転写をおこなった写字生 (scribe) を一人の言語使用者と捉え、その綴り字上のヴァリエーションの分析をおこなった。より具体的には、Pepys 2125 写本（ケンブリッジ大学所蔵）の最初のテキストである *The Chastising of God's Children* を中心に、中英語期の *woman* という語の綴り字の変動を取り上げた。語の成り立ちを示す *wifman* のような古い綴り字はすでに使用されなくなっているものの、*womman* のように *m* が重なる綴り字はこの時期でもまだ観察可能である。業績- では、この *womman* と *woman* の揺れが個人言語の中でどの程度起こるかを分析するとともに、その分布のあり方と英語史全体から見た言語変化を関連付けることができる点を指摘した。

#### (2) 個人言語の中の形態のヴァリエーション

上と同様の視点から、基本語彙である *those* の形態についても分析をおこない、その結果を業績- の口頭発表で報告した。*that* の複数形については、中英語期全般を通じて *-s* 語尾がつかない *tho* が広く使用されていたことが知られている。しかしながら、中英語期の終わり頃からは急速に *those* が広がり、この形態がそのまま英語に定着した。本研究では、*-s* がついた *those* を使用したとしてしばしば先行研究でも取り上げられる William Caxton の作品を調査するとともに、同時代の『パストン家書簡集』についても、*-s* の有無についての詳細な分析を進めた。『パストン家書簡集』では異なる著者ごとに形態上の揺れを分析することが可能であり、また地域的には Caxton の英語よりもやや北部に属するため、全体として当時の言語変化を地理的な要因からも解析することができた。

全体として、15 世紀がこの変化の鍵となることを具体的に示すことができた。また *tho* から *those* への変化が多く、言語変化に比べて急速に進んだ背景に、*those* が使用される文法的な環境、綴り字が混同されやすい語の存在等があることを議論した。

以上、大規模コーパス等によって概観することができる言語の通時的変化と、その言語変化に寄与する個々の言語使用者の言語との関係を探ることが、言語変化のメカニズムを明らかにするにあたって重要であることを、本研究期間において明らかにすることができたといえる。議論のために具体的に上げることができた言語現象は限られているが、英語における史的コーパス言語学の展開の中で繰り返し議論されてきたコーパスの規模や構築のあり方についても多様性が求められることを、少なくとも一定程度示すことができたと考えられる。

#### 【研究期間内の業績一覧】

Iyeiri, Yoko. 2020. "So-called *-ingly* Adverbs in Late Middle and Early Modern English", in *Corpora and the Changing Society: Studies in the evolution of English*, ed. Paula Rautionaho, Arja Nurmi, and Juhani Klemola, pp. 199-222. Amsterdam: John Benjamins. (図書)

Iyeiri, Yoko. 2020. "Selected Authors' Writings in the Early Modern English Period and the Historical Development of *Always*". *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*

59: 295-307. (論文)

Iyeiri, Yoko. 2018. "So-called *-ingly* Adverbs in Middle and Early Modern English". ICAME 39, University of Tampere, Finland, 2 June 2018. (口頭発表)

Iyeiri, Yoko. 2021. "Intra-text Variation as a Case of Intra-writer Variation: Middle English Scribal Behaviours". HiSoN 2021, Erlangen (Online), 18 March 2021. (口頭発表)

家入葉子. 2021. 「15世紀文献に見る *tho* から *those* への変化」英語史研究会第30回大会シンポジウム「英語史における代名詞研究の質的・量的アプローチ」オンライン、2021年4月10日.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yoko Iyeiri	4. 巻 59
2. 論文標題 "Selected Authors' Writings in the Early Modern English Period and the Historical Development of Always"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University	6. 最初と最後の頁 295-307
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoko Iyeiri
2. 発表標題 "Intra-text Variation as a Case of Intra-writer Variation: Middle English Scribal Behaviours"
3. 学会等名 HiSoN 2021, Erlangen (Online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 家人 葉子
2. 発表標題 "So-called -ingly Adverbs in Middle and Early Modern English".
3. 学会等名 ICAME 39 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 家人 葉子
2. 発表標題 15世紀文献に見る tho から those への変化
3. 学会等名 英語史研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Paula Rautionaho, Arja Nurmi, Juhani Klemola, Yoko Iyeiri, 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 xii, 305 pp.
3. 書名 Corpora and the Changing Society: Studies in the evolution of English	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------